

「文明 西洋が覇権をとれた6つの真因」

ニール・ファーガソン(著)、仙名紀(訳)

勁草書房 2012年7月20日刊

本書は、金融史や戦史の分野で多くの著作を著し、公開講座や一般紙への寄稿でも世界的に大きな注目を集めている歴史学者の手によるものである。

本書の主題は、16世紀以後20世紀末まで500年にわたってヨーロッパが他の地域よりも先進的な立場に立てた理由を見出そうというものである。さらにヨーロッパの興隆を解明し将来の見通しを立てること、あるいはヨーロッパの没落がいつ起こるのかを知ることにある。

著者はヨーロッパ文明の優位性を生み出した原因は、①競争、②科学革命、③法の支配と代議制、④現代医学、⑤消費社会、⑥労働倫理、にあるという。もちろんアジア史の専門家からは、アジアにもこれらに対応する進歩は見られたという議論もあるだろう。著者の狙いは、あくまでも従来型の文明論、すなわち、資本主義や議会制民主主義、科学革命、産業革命などの切り口からではなく、歴史を読み解いていくということにある。

ここで著者は、さまざまな国のエピソードを結び付けながら比較経済史のアプローチを使って、いかにヨーロッパが近代化してきたかを、興味深く語っており、そのエピソードの豊富さを味わうだけでも本書を読む価値はある。

しかしながら、本書ではヨーロッパとアジアが厳密に比較検討されているわけではなく、1970年代以後、急速にヨーロッパおよび北米にキャッチアップしてきたアジアの興隆の理由は十分に検討されていない。ヨーロッパが文明としての活力を失っているのは、自らの文化遺産に対する理解や、それに対する信念に欠けているからではないかという説明はいささか拍子抜けするものとなっている。

また、文明の没落は短期間で起こるという歴史的エピソードや、急に歴史の流れが変わるありさまを数学的に表現した相転移に見られるような複雑系からの知見を紹介しながら、ヨーロッパ文明も崩壊する可能性を示唆している。これも厳密な議論がされているわけではなく、ヨーロッパ文明の普遍性を考えると、没落することはないという希望もにじませており、歯切れが悪い。